Title	ベトナム語クアンナム方言の音韻に関する共時的・通時的研究
Author(s)	通山, 絵美
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72344
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　　名　（　　通山　絵美　　）	
論文題名	ベトナム語クアンナム方言の音韻に関する共時的・通時的研究

論文内容の要旨

本稿は、ベトナム語クアンナム(Quảng Nam)方言の音韻に関する共時的・通時的研究である。2016年に11地域19地点で行った事前調査を基に、まず調査対象として５地点を選出し、2017年に当該５地点で行った調査のデータに基づき、クアンナム方言の音韻体系を記述する。また、他の南部方言との比較により、ベトナム語南部方言からの分岐過程、更には現代の各方言の成立過程を考察し、ベトナム語方言形成史におけるその位置づけを明らかにする。

本稿では、クアンナム方言を広義と狭義に分けて定義し、広義ではベトナム社会主義共和国、南中部地方のクアンナム省と、隣接するダナン(Đà Nẵng)中央直轄市及びクアンガイ(Quảng Ngãi)省の一部に分布するベトナム語方言を指す。狭義では、音韻的・語彙的特徴に共通点の多い５方言を指す。具体的には、ホイアン(Hội An)市のホイアン方言、ディエンバン(Điện Bàn)市のディエンバン方言、ダイロック(Đại Lộc)県のダイロック方言、タンビン(Thăng Bình)県のタンビン方言、ズイスエン(Duy Xuyên)県のズイスエン方言である。本稿ではこの５方言を研究対象とする。

クアンナム方言の代表的な先行研究として、Vương Hữu Lê (1974), Cao Xuân Hạo (1986), Đoàn Thiện Thuật (1991), Hoàng Thị Châu (1991), Lý Toàn Thắng (2006), Shimizu (2012; 2013), Phạm, Andrea Hòa (2014; 2017)が挙げられる。これらの先行研究は、クアンナム省諸方言の音韻体系の共時的考察であり、対象となった方言や調査時期の違いにより差異が見られるものの、その内部の差異や系統関係には言及していない。また、通時的考察としては、Cao Xuân Hạo (1986)やShimizu (2012; 2013)があり、ベトナム語正書法に基づく音韻体系や北部方言との比較による音変化の過程が示されているが、同方言の成立過程には言及していない。そこで本稿では、(1)先行研究が述べる音声的特徴を踏まえ、独自に収集したデータの分析により、クアンナム方言の音節構造を$(C_1)V(C_2)/T$と解釈し、それに基づく新たな音韻解釈を行う。(2)５方言の共時態の比較により、クアンナム祖方言の音韻体系を示す。(3)クアンナム祖方言と南部サイゴン方言の比較により再構される、南部方言共通祖語の音韻体系を示す。(4)現代クアンナム方言及びクアンナム祖方言の形成過程において、主母音の前後に生起する発芽音(後に独立した音素となるわたり音)と、その音韻化を始めとする一般的な音変化の過程を示す。

本稿は全9章から成り、これを第一部から第三部に分ける。

第一部「序論」(第1章~4章)は導入部であり、本稿で使用する基本概念の説明や定義を行う。第1章では、クアンナム方言の系統的位置づけやクアンナム省の概況について述べる。第2章では、本稿に関わる先行研究として、ベトナム語方言研究史、比較対象となるベトナム語正書法体系、北部方言、南部方言の音韻体系を示す。第3章では、クアンナム方言に関する先行研究について述べる。第4章ではデータの収集方法について述べる。

第二部「クアンナム方言の共時的考察」(第5章~7章)では、クアンナム省ホイアン方言、ダイロック方言、ディエンバン方言、タンビン方言、ズイスエン方言の音韻的・語彙的特徴について共時態を分析する。第5章では５方言の音韻体系の共時的記述を行い、第6章では同方言の語彙的特徴とその分布、第7章では、５方言において共時的に観察される音韻的特徴の世代差や正書法の影響による標準化の傾向について考察する。

共時態を分析した結果、次のような音韻体系が得られた。音節構造は$(C_1)V(C_2)/T$であり、北部方言や正書法体系に見られるような、頭子音(C_1)と主母音(V)の間に介在する介音のスロットのない構造を有する。Hoàng Thị Châu (2009:118)も南部方言の特徴として介音の不在に言及している。また、ホーチミン市に分布するサイゴン方言に関する先行研究においても、音節構造に介音を認めるものの、北部方言や正書法体系と比較すると、共起できるC_1が少なく、生起条件が異なることが報告されており(Thompson, 1959; Huỳnh Công Tín, 1999; 近藤, 2017など)、$(C_1)V(C_2)/T$の音節構造は南部方言の特徴の１つであると考えられる。クアンナム方言の共時的な音韻体系における子音音素は/p, b, m, f, v, u̯, t^{h}, t, d, n, s, l, r, t̪, c, ɲ, i̯, k^{h}, k, ŋ, k^{hw}, ŋ^{w}, k^{w}, ə̯, ɣ, h/である。このうち/p, ə̯/を除く全ての子音が頭子音C_1の位置に生起できる。一方、末子音C_2の位置に生起するのは/m, p, n, t, ŋ, k, ŋ^{w}, k^{w}, i̯, u̯, ə̯/であり、３種の非成節母音/i̯, u̯, ə̯/を認める。５方言共通の母音音素は/i, e, ɛ, ɨ, ɤ̆, ə, a, ă, u, o, ɔ/であり、北部方言や正書法体系に見られる二重母音を持たない。また、中舌広母音/a/と中舌狭母音/ɨ/はそれぞれ長短対立を有する。声調は５声調を弁別し、それぞれTone 1: level [33], Tone 2: falling [22], Tone 3: broken [2ʔ4], Tone 4: rising [25]しばしば[25ʔ], Tone 5: glottalized [2ʔ2ʔ]である。

ベトナム語方言学では一般的に、音韻的・語彙的特徴に基づきベトナム語を３つの主要な方言に分類し、それぞれ北部方言(北部各省に分布する諸方言)・中部方言(タインホア(Thanh Hóa)省からハイヴァン(Hải Vân)峠に至る北中部地方の各省に分布する諸方言)・南部方言(ハイヴァン(Hải Vân)峠以南に分布する諸方言)である。(Hoàng Thị Châu, 2009: 91)。共時態の分析の結果、音節構造、母音、声調体系に見られる共通性から、本稿ではクアンナム方言を南部方言の下位方言と結論付ける。また、考察対象である５方言のうちホイアン方言、ディエンバン方言及びダイロック方言の３方言は、一部の語彙が音声的に異なる形式で実現されるものの同一の音韻体系を有することがわかった。

本稿は音韻に関する共時的・通時的記述を主目的とするが、クアンナム省諸方言において共時的に観察される語彙的特徴についてもふれる。特に分布が特徴的なのは、主に中部方言に見られる疑問詞、文末助詞であるmô「どこ, どれ」, răng「なぜ」, rứa「そのような」, tê「あれ」, chi「何」である。これには、標準形式のđâu「どこ」, nào「どれ」, sao「なぜ」, vậy「そのような」, kia「あれ」, gì「何」が対応するが、これら２系列の形式の分布を調べた結果、５方言を含む一部のクアンナム省の方言では前者が、その他の方言では後者が用いられることが分かった。一方、上記の疑問詞、文末助詞を除き、南部方言特有の語彙も多く観察されたが、これに関してクアンナム省諸方言間では差異は確認されなかった。従って、上述のHoàng Thị Châu (2009)の３方言区分によれば、クアンナム省は南部方言区の北端であり、中部方言と南部方言の境界に位置するが、その地理的分布を反映する結果が得られた。

第三部「クアンナム方言の通時的考察」(第8章、9章)では、クアンナム祖方言の音韻体系の再構を試み、その形成過程について考察する。第8章では、第二部で示した５方言の共時態と、５方言と系統的に近いと考えられるクアンナム省に南接するクアンガイ省のソンティン(Sơn Tịnh)方言の比較により、クアンナム祖方言の音韻体系を再構する。第9章では、南部方言共通祖語からクアンナム祖方言への分岐過程、クアンナム祖方言から現代クアンナム方言への分岐過程を示し、ベトナム語方言形成史におけるクアンナム方言の位置づけを考察する。尚、本稿で示す南部方言共通祖語の音韻体系は、ホーチミン市のサイゴン方言、クアンナム祖方言の再構に用いた５方言、及びクアンナム省に南接するクアンガイ省ソンティン(Sơn Tịnh)方言との比較により再構したものである。

通時的考察では、クアンナム祖方言を再構するとともに、その形成過程と、そこから分岐した狭義のクアンナム方言及びクアンガイ省ソンティン方言の系統関係について考察した。得られた結果は次の通りである。

まず、クアンナム祖方言から５方言及びソンティン方言が派生し、形成される過程において、次の特徴が確認された。(1)主母音の前後に発芽音が生起しやすく、(2)発芽音は音韻化してC_2のスロットを占めようとするが、(3)その結果C_2に生起する非成節母音/ -i̯, - u̯/は消失する。

続いて、南部方言共通祖語からクアンナム祖方言の形成過程において、次の特徴が確認された。(1)主母音の前後に発芽音が生起しやすく、(2)発芽音は音韻化してC_2のスロットを占めようとするが、(3)その結果、非成節母音/*-i̯, *-u̯/が消失するのではなく、発芽音との融合が生じる。因みに、/*-i̯, *-u̯/以外の末子音ではこの音変化は生じない。このほか、南部方言で共通した音変化と考えられる二重母音の単母音化、狭母音の中舌化、末子音/-n, -t/の/-ŋ, -k/への合流も、この段階で生じたことが確認された。

南部方言共通祖語からクアンナム祖方言が分岐する過程と、クアンナム祖方言から現代クアンナム方言が分岐する過程では、主母音前後に発芽音が生起しやすい共通の特徴を有するが、発芽音の音韻化の過程において非成節母音/*-i̯, *-u̯/は異なる音変化を被る。

クアンナム方言の形成過程を段階的に分析することで、同方言の形成過程における音変化の特徴や傾向を明らかにすることができた。一方、それらの特徴や傾向から逸脱した音変化として、次を抽出することが出来た。南部方言共通祖語からクアンナム祖方言の形成過程において、他の南部方言には適用されなかった特殊な音変化として、母音/a/直前位置への[ɜ]の挿入が挙げられる。先行研究でも、正書法に基づく音韻体系における母音/a/が、クアンナム方言では母音/ɔ/で実現されることが指摘されており(Vương Hữu Lê, 1974; Đoàn Thiện Thuật, 1991など)、また、Cao Xuân Hạo (1986)やShimizu (2012; 2013)は通時的に*a>ɔの音変化が生じたことを示唆している。本稿では、これらの先行研究と独自のデータに基づき、この音変化の実態は母音/a/直前位置への[ɜ]の挿入と分析する。この音韻規則の適用により、南部方言からの分岐を決定づける音変化が生じるが、その変化過程そのものの原因は不明である。Hoàng Thị Châu (1991)やShimizu (2013) は、末子音/-n, -t/が末子音/-ŋ, -k/に合流する音韻変化が、潮州方言などの中国語方言との言語接触により南部方言一般に広く生じた可能性を指摘するが、それと同様の外的な要因である可能性も検討せねばならない。

結論として、ベトナム語方言形成史において、クアンナム方言は次のように位置づけられる。まずクアンナム祖方言は、南部方言の共通祖語である南部方言共通祖語から分岐し、形成された。クアンナム祖方言はまず２系統に分化し、そこから現代の各方言が形成されたという過程を示す。本稿ではこれらの２系統をA、Bとし、Aはトゥーボン(Thu Bồn)川以北に、Bはトゥーボン川以南に位置する地理的分布についても明らかにした。Aに属するホイアン、ディエンバン、ダイロック方言は同一の音韻体系を持ち、１つの方言のバリエーションであると考えられるが、一部の韻(Rhyme)においては音声的に異なる形式で実現される。タンビン方言、ズイスエン方言、クアンガイ省ソンティン方言の３方言はBに属する。クアンナム祖方言から分岐する過程で、A、Bは同様の音韻規則ならびに適用順序に従うが、その適用の有無によりそれぞれ異なる２系統に分岐したものと考えられる。ただし、一部の韻においては、各方言の音変化の進行状況の違いにより、例外が存在する。

本稿では特に韻の体系に基づき、その音変化を辿ることで各方言の形成過程と系統関係の解明を試みた。また、祖方言再構の目的から分析対象となる方言を限定したが、今後はより包括的な視点からクアンナム方言及び南部方言の形成史を解明するべく、さらに分析を深めたい。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　通山絵美　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主査　教授	清水政明
	副査　教授	米田信子
	副査　講師	鈴木慎吾
	副査　講師	大塚行誠
	副査　講師	Phan Thi My Loan

論文審査の結果の要旨

上記学生の学位論文「ベトナム語クアンナム方言の音韻に関する共時的・通時的研究」を審査した結果、「合格」と判断した。以下にその詳細を報告する。

本稿は、ベトナム語クアンナム(Quảng Nam)方言の音韻に関する共時的・通時的研究である。2016年に11地域19地点で行った事前調査を基に、まず調査対象として５地点を選出し、2017年に当該５地点で行った調査のデータに基づき、クアンナム方言の音韻体系を記述した。また、他の南部方言との比較により、ベトナム語南部方言からの分岐過程、更には現在の各方言の成立過程を考察し、ベトナム語方言形成史におけるその位置づけを明らかにした。

本稿では、クアンナム方言を広義と狭義に分けて定義し、広義ではベトナム社会主義共和国南中部地方のクアンナム省と、隣接するダナン(Đà Nẵng)中央直轄市及びクアンガイ(Quảng Ngãi)省の一部に分布するベトナム語方言、狭義では、音韻的・語彙的特徴に共通点の多い５方言を指すとした。これら５方言（ホイアン(Hội An)市のホイアン方言、ディエンバン(Điện Bàn)市のディエンバン方言、ダイロック(Đại Lộc)県のダイロック方言、タンビン(Thăng Bình)県のタンビン方言、ズイスエン(Duy Xuyên)県のズイスエン方言）を研究対象とした。

クアンナム方言の代表的な先行研究として、Vương Hữu Lê (1974), Cao Xuân Hạo (1986), Đoàn Thiện Thuật (1991), Hoàng Thị Châu (1991), Lý Toàn Thắng (2006), Shimizu (2012; 2013), Phạm, Andrea Hòa (2014; 2017)が挙げられるが、これらの先行研究は、クアンナム省諸方言の音韻体系の共時的考察であり、対象となった方言や調査時期の違いにより差異が見られるものの、その内部の差異や系統関係には言及していない。また、通時的考察としては、Cao Xuân Hạo (1986)やShimizu(2012; 2013)があり、ベトナム語正書法に基づく音韻体系や北部方言との比較による音変化の過程が示されているが、同方言の成立過程には言及していない。そこで本稿では、(1)先行研究が述べる音声的特徴を踏まえ、独自に収集したデータの分析により、クアンナム方言の音節構造を$(C_1)V(C_2)/T$と解釈し、それに基づく新たな音韻解釈を行った。(2)５方言の共時態の比較により、クアンナム祖方言の音韻体系を再構した。(3)クアンナム祖方言に加え、それと南部サイゴン方言の比較により再構される南部方言共通祖語の音韻体系を示した。(4)現代クアンナム方言及びクアンナム祖方言の形成過程において、主母音の前後に生起する発芽音(後に独立した音素となるわたり音)と、その音韻化の過程をはじめとする一般的な変化過程を示した。

本稿第一部「序論」(第1～4章)では、本稿で使用する基本概念の説明と定義を行った。第1章では、クアンナム方言の系統的位置づけ、クアンナム省の概況、第2章では、本稿に関わる先行研究として、ベトナム語方言研究史、比較対象となるベトナム語正書法体系、北部方言、南部方言の音韻体系、第3章では、クアンナム方言に関する先行研究、第4章ではデータの収集方法について述べた。

第二部「クアンナム方言の共時的考察」(第5～7章)では、クアンナム省ホイアン方言、ダイロック方言、ディエンバン方言、タンビン方言、ズイスエン方言の音韻的・語彙的特徴の共時態を分析した。

第5章では５方言の音韻体系、第6章では５方言の語彙的特徴とその分布、第７章では、５方言における音韻特徴の世代差や正書法の影響による標準化の傾向について考察した。

共時態を分析した結果、同方言の音節構造は$(C_1)V(C_2)/T$であり、北部方言や正書法体系に見られるような、頭子音(C_1)と主母音(V)の間に介在する介音のスロットのない構造を提案した。因みに、Hoàng Thị Châu (2009)は、サイゴン方言等においても介音のスロットを立てない分析の可能性に言及しており、$(C_1)V(C_2)/T$の音節構造が南部方言に一般的であった可能性を指摘した。５方言に共通する子音の音素リストは/p, b, m, f, v, u̯, tʰ, t, d, n, s, l, r, ʈ, c, ɲ, j̱, kʰ, k, ŋ, kʰʷ, ŋʷ, kʷ, ɰ, ɣ, h/である。このうち/p, ɰ/を除く全ての子音が頭子音(C_1)の位置に生起する。一方、末子音(C_2)として生起するのは/m, p, n, t, ŋ, k, ŋʷ, kʷ, j̱, u̯, ɰ/であり、３種の非成節母音/j̱, u̯, ɰ/を認めた。５方言共通の母音音素は/i, e, ɛ, ɨ, ɤ̆, ə, a, ă, u, o, ɔ/である。北部方言や正書法体系に見られるような主母音のスロットに生起する二重母音を認めず、中舌広母音/a/、中舌狭母音/ɨ/にはそれぞれ長短対立があるとした。声調は５つの声調素を弁別し、Tone 1(level [33]), Tone 2(falling [22]), Tone 3(broken [2ʔ4]), Tone 4(rising [25]), Tone 5(glottalized [2ʔ2ʔ])とした。

ベトナム語方言学では、音韻的・語彙的特徴に基づき３つの主要方言に分類し、北部方言を北部各省に分布する諸方言、中部方言をタインホア(Thanh Hóa)省からハイヴァン(Hải Vân)峠に至る北中部地方の各省に分布する諸方言、南部方言をハイヴァン(Hải Vân)峠以南に分布する諸方言と考えるが(Hoàng Thị Châu, 2009: 91)、共時態の分析の結果、音節構造、母音・声調の体系に見られる共通性から、クアンナム方言を南部方言の下位方言と結論付けた。また、考察対象である５方言のうちホイアン方言、ディエンバン方言及びダイロック方言の３方言は、一部の語彙が音声的に異なる形式で実現されるもののより高い共通性が認められることを指摘した。

５方言の語彙的特徴について、特に分布が特徴的なのは、主に中部方言に見られる疑問詞、文末助詞であるmô「どこ，どれ」, răng「なぜ」, rứa「そのような」, tê「あれ」, chi「何」である。これらは、北部方言のđâu「どこ」, nào「どれ」, sao「なぜ」, vậy「そのような」, kia「あれ」, gì「何」が対応するが、２系列の形式の分布を調べた結果、５方言を含む一部のクアンナム省の方言では前者が、その他の方言では後者が用いられることが分かった。一方、上記の疑問詞、文末助詞を除き、南部方言特有の語彙も多く使用されるが、これに関してはクアンナム省の各方言間で差異は見られなかった。したがって、クアンナム省はHoàng Thị Châu (2009)の３方言区分によれば、南部方言区の北端、つまり中部方言と南部方言の境界に位置するが、その地理的分布を反映する結果が得られた。

第三部「クアンナム方言の通時的考察」(第8、9章)では、クアンナム祖方言の音韻体系を再構し、その形成過程について考察した。第8章では、第二部で示した５方言の共時態の比較により、クアンナム祖方言の音韻体系を再構し、第9章では、南部方言共通祖語からクアンナム祖方言への分岐過程、クアンナム祖方言から現代の５方言への分岐過程を示し、ベトナム語方言形成史におけるクアンナム方言の位置づけを明らかにした。尚、ここで言う南部方言共通祖語の実態は、ホーチミン市のサイゴン方言、クアンナム祖方言の再構に用いた５方言、及びクアンナム省に南接するクアンガイ省ソンティン(Sơn Tịnh)方言との比較により再構される音韻体系を示す。

クアンナム祖方言から５方言及びソンティン方言が派生し形成される過程において、(1)主母音の前後に発芽音が生起しやすく、(2)その発芽音は音韻化して末子音のスロットを占めることとなり、(3)その結果末子音に生起する非成節母音/ -j̱, - u̯/が消失する、という過程を提案した。

続いて、南部方言共通祖語からクアンナム祖方言の形成過程においては、(1)やはり主母音の前後に発芽音が生起しやすく、(2)発芽音は音韻化して末子音のスロットを占めることとなるが、(3)その結果非成節母音/*-j̱, *-u̯/が消失するのではなく、発芽音との融合が生じたことを指摘した。因みに/*-j̱, *-u̯/以外の末子音ではこの変化は生じない。また、南部方言に共通の音変化として二重母音の単母音化、狭母音の中舌化、末子音/-n, -t/の/-ŋ, -k/への合流も、この段階で生じたことが確認された。

クアンナム方言の形成過程を段階的に分析することにより、同方言の形成過程で生じた音変化の傾向を示すことができたが、そこから逸脱した変化過程として、南部方言共通祖語からクアンナム祖方言の形成過程において他の南部方言には適用されなかった、母音/a/の直前位置への[ɜ]の挿入が挙げられる。先行研究でも、正書法体系の母音/a/がクアンナム方言では/ɔ/に対応することが指摘されており(Vương Hữu Lê, 1974; Đoàn Thiện Thuật, 1991など)、Cao Xuân Hạo (1986)やShimizu (2012; 2013)は、通時的に*a>ɔの変化が生じたことを示唆している。本稿では、これらの先行研究と独自のデータに基づき、

この音変化の実態は母音/a/の直前位置への[ɔ]の挿入と分析した。この音韻規則の適用により、南部方言からの分岐を決定づける音変化が生じる訳だが、その変化過程そのものの原因は不明であるとした。Hoàng Thị Châu (1991)やShimizu (2013)は、末子音/-n, -t/と/-ŋ, -k/の合流が、潮州方言などの中国語方言との言語接触により南部方言に広く生じた可能性を指摘するが、それと同様の外的要因の可能性も検討せねばならないとした。

結論として、ベトナム語方言形成史において、まずクアンナム祖方言が南部方言共通祖語から分岐し、そのクアンナム祖方言が２系統に分化、そこから現代の各方言が形成されたという過程を提案した。本稿ではこれら２系統をA、Bとし、Aはトゥーボン(Thu Bồn)川以北、Bはトゥーボン川以南に位置する地理的分布についても明らかにした。Aに属するホイアン、ディエンバン、ダイロック方言は同一の音韻体系を持ち、１方言のバリエーションと考えられるが、一部の韻(Rhyme)においては音声的に異なる形で実現される。一方、タンビン方言、ズイスエン方言の２方言、及びクアンガイ省のソンティン方言はBに属するが、クアンナム祖方言から分岐する過程で、A、Bは同様の音韻規則ならびに適用順序に従いつつも、その適用の有無により異なる２系統が生じたと結論付けた。ただし、一部の韻においては、各方言の音変化の進行状況の違いにより、例外も存在することを指摘した。

本稿では特に韻の体系に基づき、その音変化を辿ることで各方言の形成過程と系統関係の解明が試みられた。また、祖方言再構の目的から、分析対象となる方言を限定したが、今後はより包括的な視点から、クアンナム方言及び南部方言の形成史を解明するべく、さらに分析を深めることを今後の課題とした。

特に技術的な問題として、先行研究との関連性、音韻研究における語彙的特徴への言及の位置付け等が指摘され、また一部の音素(特に頭子音としての声門閉鎖音/ʔ/と一部の末子音)の分析方法に関する問題も指摘されたが、外国人にとって難解極まりない同方言の共時的音韻体系を包括的に分析するのみならず、先行研究における不備を妥当な形で修正した点は高く評価できる。また、通時的変化に関する独自の考察を通じて、ベトナム語諸方言におけるその特異な位置を、今後言語接触の観点から考察するための重要な基礎を築いた点からも、その価値は高いものであると判断した。以上に加え、審査担当者全員が高く評価するその調査の緻密さと根気強さをも考慮し、本稿が博士学位論文として相応しいレベルの内容を有すると判断し、上記の結論に至った。